

選手として、人間として成長するために



出席者(敬称略)

武智 幸徳(日本経済新聞社 運動部 編集委員)

潮 智史(朝日新聞社 編集委員)

上野山 信行(Jリーグ技術委員会委員長)

中西 大介(Jリーグ HRディベロップメントグループ マネージャー)

育成年代のJリーグ選抜チームによる海外キャンプは2005年に始まり、今年もU-13選抜を韓国(JOMO CUP 2009)、U-14選抜をオランダ、U-15選抜をブラジルに派遣した。オランダ、ブラジルでは約1週間の滞在中、同年代の選手たちとの試合やピッチ外の交流を行い、国際大会の雰囲気を感じながら、海外ならではの貴重な経験を積んだ。このキャンプに帯同したJリーグ関係者、また取材したメディアの方々にお集まりいただき、現地での印象や育成をテーマに語り合ってもらった。

「個」と「組織」

——まず、ブラジルキャンプに団長として参加した上野山さんに、キャンプの感想をお願いします。

上野山 技術、戦術の問題の再確認ができました。世界とは差があるなど、あらためて感じました。それが端的な答えです。海外ということで、選手たちはかなり緊張していたようですね。

——約1週間の現地滞在によって、選手たちは変わりましたか。

上野山 最初の試合では上野山 信行 Jリーグ
技術委員会委員長
同年代ながら、何もさせてもらえず、少なからずショックだったようですが、そこで指導者にハッパを掛けられて目が覚めたという感じはあります。

——オランダキャンプを視察した中西さんはいかがですか。

中西 5月に3泊4日で事前にトレーニングや試合を行ったこともあり、お互いを知っているという点で安心感があり、早く順応できたと思います。

——武智さん、潮さんはオランダキャンプを見て、どのような印象を持ちましたか。

潮 サッカーの中身が対照的でした。U-14選抜は各クラブから選手を集めたチームで、対戦相手は普段から一緒に練習している単独チームなのに、U-14選抜のほうがチームとして機能しているというか、うまくパスをつないで攻めていく。相手は、そういう練習をしていないのか、重視していないのか、FWにボールを入れてがんがんに攻める、DFは1対1で勝負して止めるといっ

たサッカーでした。

武智 U-14選抜のサッカーが、すごくコレクティブでした。1対1でも勝負できる選手を集めたと聞いていたのですが、それでもコレクティブになる傾向が見られました。これを前提として選手を伸ばしていくのか、それとも一度崩して、最初から一人ひとりを考えていくのか、育成のアプローチを考えさせられました。

上野山 日本は組織プレーに優れているといわれますが、個人を強くしてから組織をつくっていかないと、本当に強くない。サッカーでは得点することが最大の目標です。まずゴールを目指す、ボールを取られたら取り返すといった基本は押さえながら、選手たちの個性、本能を生かす育成が必要だと思っています。

潮 対戦相手の選手たちのプレーは、すごくシンプルな印象がありました。ゴールへ向かうのもシンプルだし、ボールを取られても本能的に奪い返しに行く。ボールをさわっていたら楽しいし、ボールを保持していなければシュートもできない、ゴールの喜びもないわけです。——ブラジルの方はどうでしたか。

上野山 ブラジルの選手も同じで、シンプルにゴールを目指し、横パスはその次という意識を感じました。まずゴールありき、というのはブラジルも同じですよ。組織プレーがうまいチームが勝てるかといえば、そうではない。ボールを丁寧に扱うこと、ゴールへ向かう重要性をあらためて感じました。

武智 オランダでもゴールした後の喜び方がすごかった。U-14選抜も、もっと喜ばいいのと思いました。これはアルゼンチンでプレーしていた日本人に聞いた話ですが、「ゴールの意味が日本と違うように感じた」そうです。ゴールが人生を変えることもある、というのが浸透しているんですね。

中西 日本の場合、海外に出ないと分からないことも多い。世界基準という大きなものさしの中で議論する場合、この年代の選手、指導者の国際経験は必要だと思います。

上野山 日本には「十年早い」という言葉があるように、社会には年少者が意思表示をしづらい素地があります。指導者は、そのあたりも考えて選手たちを導くことが大切です。

選手の自立

——貴重な国際経験を今後に生かすことも重要ですね。

上野山 ブラジルへ行った指導者たちも、「ゴールに向かうことが重要」と感じ、クラブに戻って生かそうとしているようです。

潮 海外で経験を積む機会が増えている中で、指導者間で情報を共有できるような、そういう情報交換の場はあるんですか。

中西 そのような機会もどんどんつくっていきたいと考えています。

武智 現地でお世話になった日本人に聞いた話ですが、オランダは子供を大人扱いするのが早いというんです。子供は早く大人になりたがっているし、大人は早く子供を自立させたがっている。親離れ、子離れが加速する社会だと。そういうところがサッカーに影響するところはあるんじゃないか。あつたら大変だなあ、根本的なところなので。

潮 例えば、オランダでは銀行が学生に学費のローンを組んで、卒業後に返済する仕組みがある。若いうちから大人扱いし、人生設計を自分で判断することになる。



シンプルにゴールへ向かうことの重要性を肌で感じた(U-15 Jリーグ選抜のブラジルキャンプより)

——中西さんも、そのように感じましたか。

中西 感じましたね。キャプテンの行動なんか見ていると、特にありますね。フェイエノールト(オランダ)のキャプテンだったかな。仲間を鼓舞し、審判や相手チームをリスペクトし、一つ一つの行為が大人顔負けでした。人間的な完成度も大人に近づいている感じで、コーチも完全に大人扱っていました。

——ブラジルもそうでしたか。

上野山 やはり自立していると感じました。自分の考えを持って行動し、自己主張もしっかりしている。ピッチの上でも大声で言い合っている。後で聞いたら、それぞれの役割について要求を出し合っていたそうです。

——それは指導者の方針にもよるのですか。

上野山 基本的には選手たちの自主性に任せているそうです。その中で「やる気のない者にはアプローチしない、やる気のある者に対して指導を行っていかないと甘さが出る」ということを言っていました。例えば決勝戦のように勝利が重要視される場合は、パスの出し方など、細かく指示することはあるそうです。それは、勝つことによって自信をつけることも大切という考え方によるものです。

——育成に社会環境がかかわるとなると、難しいことも多いですね。

上野山 いや、指導者のレベルがさらに上がり、人間的な教育の部分にも力を入れることができれば、問題はないと思っています。育成年代は100パーセント、指導者の責任だと考えています。ピッチ外の教育も大切です。サッカーしか教えないのでは、考える力がつかない。何歳からどのような責任を持たせるかということを一貫教育でやっていけば、人間的にもサッカーの考え方も確立していくと思います。子供たちは吸収も速いし、尊重して自立させてあげれば、育成にもいい影響を及ぼすことができるでしょう。

クラブ主催の国際大会

——オランダではクラブのホスピタリティーにも触れたようですね。

中西 各チームにリエゾンが付くのですが、主催クラブの元選手がボランティアを務めたり、そ

のお嬢さんがチームのブラカードを持ったり、欧州のクラブライフを感じさせてくれるような大会となっていて、それが素晴らしい。表彰式では各チームのキャプテンがスピーチし、優勝チームをたたえ、大会を支えた人々に感謝する。もちろん、U-14選抜のキャプテンも、頑張っ英語でスピーチしました。参加した人々の表彰式という感じで、クラブ単位の国際大会の良さを感じました。

武智 テニスでもウィンブルドンなんかを見ると、優勝者が素晴らしいスピーチをする。きっと、子供の大会でもそういう習慣があって、慣れているんでしょうね。

潮 前夜祭もあって、参加チームの代表がいさつし、主催クラブへの感謝などを述べていました。その中でPSVアイントホフエン(オランダ)のコーチが「われわれが育てるのはサッカー選手だけではない。それが大きな目的ではあるが、同時に人間を育てる」とはっきり言っていました。「プロ選手になれなかった場合でも、クラブにいたことが誇りであり、人生の自信になるような育て方をしていきたい」と。そうやって、クラブのサッカー観というものが共有できているんですね。まさにJリーグが目指すところだなと思いました。

武智 そういう大会を日本でも見たいですね。

中西 代表レベルの国際大会はあるが、クラブがホスピタリティーの mindset を持って外国のチームを迎えるというの、Jリーグの目指す国際交流という点で重要です。経費の問題もあり、最初はJリーグや日本サッカー協会も協力していく必要があると思いますが、クラブ主催の大会が開けるようになるのが理想です。

潮 先行投資と考えれば、育成と一緒に。何十年も続けていけば、大会の価値も高まり、

クラブの価値や権威も海外に知られるようになる。お金では買えないものがたくさんあるでしょう。

中西 世界中のクラブや指導者とのネットワークもできます。

——今回のキャンプを、次回以降にどのように生かしていきますか。

上野山 U-14選抜のように、あらかじめ選手が顔を合わせて練習していくか、あるいは現地できなり選手を見たほうがいいのか、そのあたりは選手の選考方法を含めて考えていきたい。こうしたキャンプを、クラブ単位でも積極的に実施してほしいですね。

中西 最近は海外で経験を積もうというクラブが増えてきました。普段から指導している選手

たちを連れていくことが大切だと思います。メキシコでは欧州や南米と肩を並べるためには、9歳から18歳までに100試合の国際試合を経験させたいという考えを持っています。日本は地理的なハンディがあり、



中西大介 JリーグHRディベロップメントグループマネージャー

克服するには欧州以上の努力が必要でしょう。

上野山 チームとしては、日本のサッカーは海外でも高い評価を受けます。でも、「彼をうちのチームに預けてほしい」と言われるような選手を育てたい。子供自身が悔しがって、喜んで。それを試合の中で経験し、その反省を踏まえて自ら次の試合に臨む。そういう環境をつくってあげたいと思っています。

中西 キャンプ後、全体を通じて指導者も選手、スタッフも「いい経験」というのはNGワードにした。いい経験で終わってしまったら、ギャップは全く埋まらない。

上野山 ブラジルの選手はハングリーだという印象を持ったようだが、そう思うだけでは追いつけない。ハングリーの中身は何なのか。プロになって家族を養いたいというのもあるでしょう。でも、プロになりたいという目標は彼らと同じ。目標に向かって強い気持ちを持ってほしい。その気持ちを持った選手に、いい指導者を付けることができれば、絶対にプロ選手になれると思います。



潮智史 朝日新聞社編集委員



ピッチ外でも積極的に交流(U-14 Jリーグ選抜のオランダキャンプより)



ファン・サポーター、サッカー人口のすそ野拡大に取り組む



Jリーグ入会1年目で中位と健闘。今後は入場者数を増やすことにも力を入れる ©北日本新聞社 さまざまな地域貢献活動。高齢者施設を訪問する選手たち ©カターレ富山

富山からJクラブの誕生

2007年9月10日。富山県のサッカー界が動いた。アマチュアサッカー最高峰の日本フットボールリーグ(JFL)に所属する富山の「アローズ北陸」、「YKK AP」の両チームを統合し、Jリーグ入会を目指す県民クラブの発足が発表されたためだ。それぞれのチームを保有する北陸電力、YKKグループをはじめとした県内の経済界、自治体などが地域一丸となってチームを支援することを誓った。「JFLを代表する富山の2チームが合併し、Jリーグクラブが誕生する」。サッカーファンのみならず、多くの県民が期待に胸を膨らませた。愛するチームを共に「語れ」「勝たれ」(富山の方言で「勝て」という意味を込めて、チーム名は「カターレ富山」に決まった。

「Jリーグが誕生して盛り上がる中、企業スポーツの限界を感じていた」。カターレ富山の清原邦彦代表取締役社長は、2年前にJリーグ入会を目指して動き始めた当時をこう振り返る。北陸電力元常務で、アローズ北陸ファンクラブの初代会長を務めた清原社長。「会社のイメージアップや地域スポーツの発展という企業スポーツの理念から、もう一つ上のステージに上がることが必要だった。多くの県民や企業の協力を得てJクラブを誕生させることができれば、富山全体が活性化すると思った」と説明する。



清原 邦彦
代表取締役社長

カターレが発足して臨んだ昨シーズンのJFL。ホーム開幕戦は世代を超えて、1万人以上がスタジアムに足を運んだ。ファンクラブ会員が1万16人になるなど県民の大きな後押しもあり、チームは順位・入場者数ともにJリーグの入会条件を1年でクリア。「1年間で昇格」という目標を見事に達成した。Jリーグ入会初年度の今季は、大きな補強がないにもかかわらず中位で踏ん張りを見せ、カターレの健闘は光る。第28節からは8戦負けなしで勝点を一気に伸ばした。今季のチーム目標である一けた順位も、十分に射程圏内だ。

地域の元気創出へ

Jリーグで中位をキープするカターレだが、課題にも直面している。ホームゲームの入場者数がJ2リーグ平均を大きく下回り、JFL時代だった昨季よりも少ない。清原社長は「フロントに昇格後の達成感があるのかもしれない。北陸3県で唯一のJリーグクラブが誕生したということ、県民にもっと認識してもらうよう努力したい」と話す。都会に比べて娯楽・スポーツ観戦といった文化が根付いておらず、堅実な県民性であることも、スタジアムへの客足を鈍らせる要因になっているのかもしれない。清原社長は「入場者を増やすためには、地道な地域貢献活動の積み重ねが大切」と力を込める。ファン・サポーターの拡大のために、カターレはさまざまな地域貢献活動に取り組んでいる。選手による高齢者施設の訪問や交通安全教室への参加など、ファン・サポーターとの距離を縮めようと懸命だ。先日もホー

ムスタジアムの近隣住民と一緒に、道路沿いに花の苗を植えて交流を深めた。保育所などでの巡回サッカー教室は、年間160回を数え、サッカー人口のすそ野拡大にも力を入れている。ホームゲームでは、「富山市の日」「高岡市の日」と銘打ったイベントを開催。特産品販売のほか、キックオフ前やハーフタイムに地域の伝統文化の披露があり、ふるさとの魅力を広く知ってもらうことにも一役買っている。清原社長は「試合のスケジュールに影響しない限り、選手とファン・サポーターの交流を積極的に図っていきたい。カターレに少しでも興味のある方は遠慮をせずに、どんどんカターレ富山にアプローチしていただきたい」と話す。

富山県総合計画「元気とやま創造計画」には、「みんなで創ろう！人が輝く元気とやま」というフレーズがある。カターレのクラブ理念も同じで、今後はさらに多くの地域貢献事業を展開する。10月末のホームゲームでは、「いきいき健康アカデミー」と題した介護予防事業を開催。富山健康科学専門学校と協力し、60歳以上の高齢者を対象に健康チェックや健康づくり運動を行う。

「Jリーグで十分に戦える」という手応えをつかむ一方、入場者数の伸び悩みという大きな課題にも直面する。清原社長は「クラブが成功するためには、県民の応援は欠かせない。多くの人にスタジアムに足を運んでもらって声援を送ってほしい。そして富山を元気にしてほしい」と話す。カターレ富山の挑戦が始まったばかりだ。

(北日本新聞社 室田 雅人)

スポーツを通じて豊かな社会の創造を目指す「Jリーグ百年構想」の実現に向けて、JリーグとJクラブはさまざまな施策を展開している。その活動の最前線ともいえるJクラブは、それぞれのホームタウンを中心に、地域の特色、実情などに応じて多彩なプログラムに取り組んでいる。地域に根差し、活力を与え、人々の交流と触れ合いを促進する、こうした活動を紹介するシリーズも、今回でJ1リーグ、J2リーグの全36クラブが一巡。最終回はカタレ富山とファジアーノ岡山にスポットを当てた。



スポーツでもっと、幸せな国へ
J LEAGUE 百年構想



36 ファジアーノ岡山



ひたむきな姿勢を忘れずに クラブ一丸で「岡山のシンボル」へ



初めて誕生したプロチームに沸く岡山。入場者の数でも健闘している

スタジアム周辺のにぎわい

「岡山にJリーグのクラブができました」「応援よろしくをお願いします」。大勢の通勤、通学客が行き来する早朝のJR岡山駅。木村正明代表取締役社長をはじめ、クラブスタッフ、ボランティアらが試合観戦を呼び掛けるちらし配りに汗を流す。昨年の日本フットボールリーグ(JFL)時代から続く取り組みで、いまやおなじみの風景となっている。クラブ名が浸透してきたこともあり、手に取ってじっくりと眺める人も増えてきた。

ホームゲームがある週には、同駅や岡山県庁、岡山、倉敷の両市役所で社員中心に手分けして毎回計1万5000~2万枚のちらしを配り、試合日時や見どころをPR。時には大型商業施設や商店街にも足を運び、受け取ってもらう。地元大学生と協力して、ゲームを行う岡山県陸上競技場 桃太郎スタジアム(岡山市)近くの店舗に試合告知のポスター掲出をお願いしたり、営業担当スタッフが企業の朝礼に参加し観戦をお願いすることも。「地域と誠実に向き合う」ことをモットーとするだけに、こうした地道な活動を決して怠らない。ひたむきなカラーは常に最後まであきらめない戦いを見せる選手たちだけでなく、フロントにもしっかりと根付いている。

スポンサー集めもコツコツと努力してきた。木村氏が社長に就任した3年前、協賛企業はわずかに6社。それが今では300社にまで増えている。アプローチはいたって正攻法だ。Jク

ラブが街にできる意義や子供たちに夢を与えるといった理念などを熱心に説明して回る。「朝から晩まで人に会い、クラブを知っていただいている」と木村社長。ファジアーノ岡山の発展に日々尽力する社長以下スタッフの頑張り、道を切り開いてきた。

Jリーグ入会初年度の今季は成績こそ苦戦しているが、入場者数は健闘中だ。第44節を終えた時点でホームゲーム1試合平均6,091人とJ2リーグ戦の7位に付ける。試合前のスタジアム前広場には地元名物のホルモンうどんのほか、「ファジ勝つバーガー」といったクラブ名を付けた食べ物、ビールを提供する屋台が並び、毎試合長蛇の列ができる。来場者からは「岡山で2週間に1度、お祭りがあるみたいだ」と好評を得ており、クラブ発足当初、閑散としていた試合会場は、当時信じられないようににぎわいの場となっている。

小さくてもきらりと光るクラブ

入場者数アップに貢献しているのが導入2年目を迎えた「夢パス」。小学生以下に限りホームゲームが無料観戦できる入場券で、スポンサーの6社がその入場料を負担する仕組みだ。ここまでの発行数は6,200枚を超えており、会場には親子連れをはじめ、孫を連れ来たおじいちゃん、おばあちゃんの姿も目立つようになってきた。「試合を見てもらうことで3世代の心をつなぐ一助になれば」と木村社長。家族のきずなを深め

てほしいといった願いが込められている。

岡山の街にも変化が出てきた。岡山市の通称「国体道路」(JR岡山駅西口からスタジアムまでの約1.5キロ)には試合日の沿道にチームPRのぼりが並び、「ファジロード」として活気づく。同駅近くの奉還町商店街入り口には地元高校生が手作りしたミニ神社がお目見え、ファン・サポーターが必勝祈願している様子が見られる。ファジアーノのエンブレムをあしらった大型バナーも同駅西口のビルに登場。クラブをアピールする幕が街中に常設されるのは初めてで、駅利用者らの目を引いている。玄関口はJクラブのある街にふさわしい景観を整えつつある。

初めて誕生したプロクラブに沸く岡山だが、親会社を持たず専用練習場もないなどクラブを取り巻く環境はまだまだ厳しい。木村社長は「だれもが経営に口を出し、誹謗(ひぼう)中傷を受けやすいのがプロクラブ。これからは道のりは楽ではない」と決して気を抜くことはない。そして「いたずらにクラブの規模を大きくするよりも敵をつくらず、小さくてもきらりと光るクラブを目指していく」。次なるステージ、J1リーグに向けても堅実路線を見据える。

昔話の「うさぎとかめ」の「うさぎ」のようなスピードで、しかも「かめ」のようにするべきことをきちんとこなしてきたからこそ、クラブ創立わずか5年でJ2入会を果たすことができた。その姿勢はこれからもまったく変わらない。永遠に続く「岡山のシンボル」を目指し、クラブ一丸で走り続ける。

(山陽新聞社 平野 裕久)



試合日のホームスタジアム周辺は飲食物の屋台が並び、お祭りのような雰囲気の中、多くの人々にぎわう



「若い選手の発掘に秀でた大会」

※このインタビューは2009年10月9日に実施しました。



予想外だった受賞

——今年もまた、Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝が迫ってきました。この大会には、どのようなイメージを持っていますか。

名波 シーズン初めにスタートし、長いスパンで考えなければならない大会で、その集大成が決勝というイメージです。負傷者がいたり、移籍で選手が変わったり、チームの成熟、成長が分かり、その度合いが大きいチームがファイナリストです。

——この大会を戦い抜く上で、最も大切なことは。

名波 やはりコンディションの調整です。リーグ戦も並行し、移動などもありますから。また、大会によって戦術を変える監督もいて、選手たちはそれに適応することも大切です。現在は外から大会を見る立場ですが、そこはとても勉強になるし、面白いですね。

——名波さんが、この大会で最も印象に残っていることは。

名波 (ジュビロ磐田時代の)1997年の決勝で、鹿島アントラーズに完敗した印象が強いです。ホーム&アウェイで、ホームの第1戦が1-2、アウェイの第2戦が1-5というスコアでした。日本代表の試合に招集されて準決勝までは欠場し、決勝だけ出場した「自分のせいな」などと思ったり。モチベーションは高かったのですが、結果は最低でした。

——しかし、翌年の決勝はジェフユナイテッド市原(現千葉)に4-0と快勝し、磐田は初優勝を飾りました。

名波 ドウガがブラジル代表の試合で、中山(雅史)さんが負傷で決勝は欠場しましたが、前年の経験が生きて、いい勝ち方でした。



ジュビロ磐田時代の1996年の大会

[PROFILE] 名波 浩(ななみ ひろし)
1972年11月28日生まれ。出生地は静岡県。選手時代のポジションはMF。95年にジュビロ磐田へ加入し、2008シーズンに選手生活を引退するまでACヴェネチア(イタリア)、セレッソ大阪、東京ヴェルディ1969(現 東京ヴェルディ)にも所属。磐田では1997、2002年にJリーグ優勝を経験し、ベストイレブン受賞は4回。日本代表として1998年のFIFAワールドカップにも出場した。現在は、磐田のアドバイザーを務める傍ら、テレビのサッカー解説などでも活躍している。



Jリーグヤマザキナビスコカップについて語る名波さん。右後方は1998年の同大会メインビジュアル

——大会開幕時に23歳以下の選手が対象となるニューヒーロー賞の表彰は96年に始まり、名波さんは初代の受賞者です。

名波 なぜか僕でした。同年と一緒に受賞した(当時は清水エスパルスの斉藤)俊秀は優勝しているので分かるのですが、でも、僕は予選リーグで敗退し、なぜ自分なのかよく分からなかった。——きつとプレーには光るものがあつたのでしょ。

名波 もちろん、プロになってから初めての個人賞で、とてもうれしかったです。過去の大会を振り返るときには必ず、歴代受賞者の一覧が紹介されるので、評価されて良かったなと思います。

日本サッカーへの貢献

——ニューヒーロー賞は、対象となる選手にとっては大きな励みとなるでしょうね。

名波 若い選手のモチベーション、人材発掘という意味では、他の追随を許さない、秀でた大会だと思います。この大会で出場チャンスをつかみ、トップチームのレギュラーに、そして日本代表へのステップアップにうまくつながっている感じがします。

——Jリーグの公式試合ですから、若い選手たちにとっては貴重な体験となりますね。

名波 育成組織に所属している10代の若い選手もいます。紅白戦やサテライトリーグではなく、

16歳や17歳の選手が公式試合、それも1万人や2万人を超えるような入場者の前でプレーするわけですから、かけがえのない経験となるでしょうね。

——若い選手の登竜門として、日本サッカーに果たす役割は大きいですね。

名波 過去2年間は、優勝チームがパンパシフィックチャンピオンシップやスルガ銀行チャンピオンシップへの出場権を獲得しました。国際舞台でチームは貴重な経験を積み、クラブの存在も海外に向けてアピールできる。そういった点でも、大きな役割を果たしていると思います。——さて、今年の決勝はFC東京と川崎フロンターレの対決となりました。

名波 F東京は(2004年に続き)もう1回、川崎Fは初優勝へ、それぞれモチベーションが高いでしょう。双方とも攻撃的なチームですが、速い攻撃お互いの守備がどのように対応するか楽しみます。両チームのファン・サポーターの応援も素晴らしいですから、きつと「聖地」と呼ばれる国立競技場のファイナルにふさわしい雰囲気になるでしょう。磐田でプレーしていたときの決勝でも、ゴール裏をサックスブルーに染めてくれたことが印象に残っています。スポンサーのヤマザキナビスコさんの支援もあって大会は継続し、国内の3大タイトルの一つとして定着しました。その優勝を決めるピッチに立てることは、選手冥利に尽きると思います。



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。